

経と図——清朝における経書の読解法について

廖娟

儒教の経典研究においては、遅くとも北宋時代から図解が大量に導入されるようになったが、清朝に至ると、図解の正統性や有効性について、議論が多々紛糾することになった。本報告は、図解を用いて経書を解釈する方法が、清朝において広く利用されていた事実の解明を試みるものである。主に易経学や礼経学に注目し、易研究者の胡煦や惠棟ら、さらに礼学研究者の張惠言や黄以周らの図形創見を紹介しつつ、図形利用に典型的な二大分野における図解方法論の発展を考察する。

張之洞が「諸経の圖表、皆な國朝人を以て善と為す」と述べたように、清朝の研究者たちは図形の方法に秀で、前の時代より優れていると賞賛された。清初の易学では、易図は辨偽学の重要な部分とされ、宋代易学の特徴と見なされて排斥された傾向があることを、数多くの先行研究において論じられてきたが、本報告はそれを踏まえた上で、清初の易図否定よりも、その後の時期において、易学の主な研究対象とされた漢易に数や象が多いことから、直観性の高い図形を肯定する傾向が見られたことを試論する。胡煦や惠棟らはそれぞれ「循環太極図」や「十二月爻辰圖」などを創造し、清末に至っては経師の曹元弼がさらに「図表」一卷を彼の代表作『周易学』の一部として加えた。礼学においても同様に、張惠言の『儀礼図』や黄以周の『礼書通故』などの作品があり、これらは大量の図解を以て、宮室・冠服・喪服などをイメージ化している。張・黄二人の礼図解釈は、宋代の趙彦肅や楊復らの先行研究よりも精密化しつつ、先人の不足を補っていることが明らかである。その中には、朱子学式の経書解釈よりも、礼の実用性を一層重要視する傾向が窺われる。このように、一種の情報を伝える媒介として、文字の他に図形を描いて思想を説明する学術パラダイムが、清代の経学研究者の間で実際に意識されてきたものと考えられる。